

MacWhirr 船長と伝統からの「差異」

中 村 嘉 男

Captain MacWhirr and Differene from Tradition

Yoshio NAKAMURA

I

“Typhoon”の主人公 Captain MacWhirr は、その言動が作者 Conrad から積極的に価値付けられている数少ない登場人物の一人である。しかしその彼の存在意義は、今日まで常に過小評価されてきたように思われる。過小評価してきたのは、なにも Thomas Moser のように、MacWhirr が作者からさえ興味をもたれず、その存在も十分に信じられていないと見る研究家ばかりではない¹。MacWhirr を “the embodiment of a tradition” と積極的に評価する F. R. Leavis や²、その Leavis にやや似て彼を “the unconscious servant and product of a certain training and tradition” と見る Albert J. Guerard でさえ³、彼の意義を十分に理解しているとは思えないのだ。なぜなら、Leavis や Guerard の評価の仕方では、MacWhirr と伝統との間にあるはずのずれが表現できないが、このずれこそ実は、MacWhirr と伝統との関係を本当に生きたものに行っているからである。

一般に伝統と私たちとの間にある距離について見事な洞察を示したのは、よく知られているように T. S. Eliot である。Eliot は、伝統を、すぐ前の世代から受け渡されるものと狭く限定して捉えることを否定した。狭い伝統概念では、伝統は機械的に繰り返される固定したものになってしまうのだ。伝統とは、Eliot によれば、“a matter of much wider significance” なのであり、西洋の文学者に限定して言えば、Homer の時代からのヨーロッパ文学の全体を同時に把握する “historical sense” なくしては捉えられないものである⁴。

Eliot の伝統論が教えてくれることの一つは、直接に受け継がれる伝統の無意識的 “servant” ないし “embodiment” となっていては、伝統は真に生かせない

ということである。伝統を生かすには、無意識的に具現している慣習のような伝統からの距離が不可欠なのだ。ところが、この距離が MacWhirr と伝統との間には存在していないかのような誤解を与えてしまう表現を Leavis はしているし、Guerard にいたっては、その距離を殆んど否定していると言えよう。この Guerard の評言から、MacWhirr を “an absolute literalist” と見る Lawrence Graver の侮蔑的評言⁵ への墮落は自然でかつ必然的である。なぜなら、伝統との間に距離を認められなければ、MacWhirr は伝統の繰り人形となって自らを機械的に固定的に繰り返すほかないからだ。

もっとも、MacWhirr が固定的に捉えられてきたのも仕方がないような描かれ方がなされていると思う人は多いかも知れない。例えば、彼が “facts” に忠実でそれのみを彼の意識は映していると書かれた文は⁶、彼の事実への固定的な密着ぶりを典型的に示していると思なされるかも知れない。しかし私はこの文を全く違った意味に理解する。すなわち、MacWhirr の感情を交えない現実認識の仕方に、彼が二十年に渡る作者の船乗り生活から生み出された人物だと言われた (p. vi) 意味を見るのだ。つまり、MacWhirr の現実への接し方は、Husserl の現象学的還元に近似しており、私たちを現実へ結び付けている様々な絆を一端切ったときの虚心な態度に似ていると思うのである。それは、様々な感情や臆断に囚われて生きる人の現実認識よりも、現実に対して健全な距離を保っていると言えないだろうか。しかもその距離は、固定的に保持されるのではなく、現象学的還元を経たあとの自然的生活者と世界との距離のように見分けにくくなる。あるいは、大げさな比較になるが、「横超」を経たあとの親鸞と世界との距離のように判然としなくなる。

もちろん、この一見存在しないかと思える距離故に MacWhirr は今日まで誤解されてきたのだ。例えば、彼が船から陸に上がる時に身につける決まりきった服装や、妻に定期的書き送る千編一律の内容の手紙などは、彼が慣習の隷属者以外の何者でもないかのような印象を与えてきたのである。実際は彼は、慣習の人を隷属させる一般的な力にもかかわらず、それとの間に普通の人には出せない趣を出しているのだ。彼と伝統との差異について考えを進めるにあたって、まず、彼とこの支配力の強い慣習との関係から見ていこう。

II

慣習とは普通私たちが無意識のうちに従っているものだから、それとの差異は

最初から存在しないように見える。しかし、MacWhirr が港に着いて陸に上がる
ときの服装は、誰の目にも明らかな慣習とのずれを感じさせる。なぜなら彼は、
東南アジアの港だというのに、褐色の山高帽にスーツをきっちり着こみ、黒い不
格好なブーツまではくからである (p. 3)。一見彼のこの身なりは、彼がイギリス
で身につけた慣習が東南アジアに来ては抜けられないだけのように見える。そのよう
に理解した場合、彼は環境への順応もできない木偶の坊になってしまうだろう。

ところが、彼のことをそのように考えてすますわけにいかないのは、彼と違っ
て環境に素直に順応する人の方がより無自覚な慣習の踏襲者ではないかと思われ
るからである。東南アジアではその気候に合わせて軽装する白人の方が、まる
で “the difference of latitudes” (p. 3) が判らないかのように正装する MacWhirr
より一層無意識的な自然的生活者だと言えるのではあるまいか。というのも、ごく
平凡な人でも、後者の正装をするにはある意識が必要とされるからだ。実は前者
こそ、慣習という現実に応じたものの実際のかつ正統的な継承者にほかなら
ないが、MacWhirr はそのような正統派から明らかにずれているのだ。しかもそ
のずれは不思議なことに、周囲の人をうとうとがらせるどころか、ある独特な
“smartness” を感じさせるのである (p. 3)。これを単なる怪我の功名と見るこ
ともできるかも知れない。しかし、それでは彼にしゃれた服装の選択を行なわせた
センスを——たとえそれが少々無意識的であってもそこに差異化の動きを含んで
いたセンスを——見くびることになるだろう。

慣習の literal な継承者と MacWhirr のずれは、彼が妻に定期的書き送る手
紙にも窺われる。何の変哲もない彼の手紙は、彼の服装同様、自然的生活者には
出せない独特な味を出しているのだ。なぜそうなるかと言うと、彼と妻の関係が
うまくいってないからである。妻としっくり行かないのにあたかも何事もないか
のように定期的手紙を書き送るには、意識的な努力がある程度必要なことは言
うまでもあるまい。彼の妻は虚栄心の固まりのような女で、虚飾の生活に自足し
ていたため、おもしろくも何ともない現実そのもののような夫がいつか船乗りを
やめて帰って来る日を恐怖していた。この妻に向かって MacWhirr は、あたかも
平時の自分を押しつけるかのように、砂をかむように味気ない航海日誌のような
手紙を長々と書きつづって定期的送り付け、しかもその書き出しと末尾にいつ
も “My darling wife” と “your loving husband” と書くのだ (pp. 14-15)。この
慣用的な言葉使いは、彼の慣用的な服装と共に、現実のつらさを際立たせている。
服は熱帯の暑さを、手紙の初めと終わりは夫婦の不毛な現実を一層はっきり感じ
させるのだ。が、不思議なことに、そのために現実が一層耐え難い様相を呈して

くるわけではない。むしろ逆である。手紙について言えば、MacWhirr の鈍重な言葉使いは、彼の素朴な人柄と相まって、虚栄心に振り回されている妻の精神的脆さをはねつけるのではなく、それを強く目立たせながら大きく包みこむような働きをしていると感じられるのである。

恐らく、これもまた単なる怪我の功名と見る人もいるだろう。そのように見る人は、MacWhirr が自分の妻との関係を把握することもできないほど鈍感な男と考えているわけだ。このような見方が到底受け入れ難いのは、MacWhirr が自らの行動によって何回も、世界に無批判的に埋没した人の鈍感さと自分の素朴さとの間に質的な差異の線を創っているからである。その差異線は“Typhoon”において一貫して見られる。それは、一等航海士 Jukes が世界に無批判的に埋没した善意の自然人の代表として、MacWhirr に常に対置されているからだ。二人の差異は、台風の時と、台風が静まった直後の銀貨の分配の時に最も際立つが、平時においても判然としている。例えばシャムの国旗をめぐる二人の意見の対立は、世界に埋没した者とそれから一步身を離してそれに関わることを知った者との差異を如実に示している。以下、このシャム国旗をめぐる二人の対立をしばらく見てみよう。

この対立は、便利だからという理由で船主が船籍をイギリスからシャムに換えたため、白人としての誇りを傷つけられたように感じた Jukes が、旗の真中におもちゃのような象の描かれているシャムの国旗を苦々しげに見ながら、船長に向かって“Queer flag for a man to sail under, sir.”と言ったことから始まる。このコメントに対して MacWhirr が“What’s the matter with the flag? ... Seems all right to me.”と無頓着な答え方をしたため、思わずムッとして感情的になった Jukes が“Well, it looks queer to me,”と言い張ってしまったのだ。部下のこの感情的発言にちょっと驚いた MacWhirr は、図鑑まで参照して旗が“queer”でないことを確認したあと、そのことをわざわざ彼に伝えたのである (p. 10)。

この MacWhirr は一見単純な literalist に見え、実際そのように理解する研究家もいるのだが、実は、無思想な単純さを見せているのは、当時の白人のほとんど持っていた東洋への優越感に自らも捉えられ、それをそのまま無自覚に表わしている Jukes の方だと言えよう。Jukes の“queer”という言葉の使い方は、当時の一般の白人たちの“racial superiority” (p. 13) をそのまま反映しているという意味で literal であり、彼こそ無思想な literalist だと見なせるのだ。これに対して MacWhirr の literalism は、“queer”の意味を「正常なものと違っている」

と受け取ることによって Jukes の主張する意味をずらしており、Jukes の主張に典型的に現われている一般大衆の単純さとの差異を際立たせているのである。さらに、シャムの国旗に描かれた象について、“That elephant there, I take it, stands for something in the nature of Union Jack in the flag.” (p. 11) と語る MacWhirr は、イギリス国旗とシャム国旗を併置できる稀有な視点の持主だと言える。この彼の言葉は、白人中心主義を疑うことも知らず、無自覚のうちに後進国への差別意識に捉われていた当時の平均的な白人の口から自然に出てくる言葉では決してないのだ。

また MacWhirr は、世界への無批判的な埋没者とのずれを、併置の視点によって明らかにしているだけではない。一見類似したものの差異性を見極める力もまた彼のものであり、これによって彼は、Jukes のような自然的存在者と自分との違いを鮮明にしているのだ。この峻別力は、例えば、Jukes が苦力^{クーリー}たちのことを “our passenger” (p. 31) と言ったときに見せた彼の激しい苛立ちに窺われる。苦力のことを “passengers” と言うのは、苦力と白人船客の欺瞞の混同であり、自らの差別意識に鈍感な人がよく使うきれいな言葉使いにはかならない。この Jukes のおかしい表現に苛立った MacWhirr は、苦力のことを “passengers” というのは聞いたことがないと、事実を事実として述べる。船倉に荷物のように入れられた苦力を船客とは呼べないと言うのは、差別的な現実の肯定ではなく、それへの直視である。それは、苦力を船客と呼ぶことを拒絶することによって差別的な現実を際立たせ、そのことを通して差別的な現実を糊塗しようとする動きに厳しく対峙するのだ。

こうして MacWhirr の素朴さは、世界に埋没した善良な市民のだまされやすさをそのまま反映している Jukes の単純さとの差異性を際立たせている。しかし MacWhirr の素朴さがその最高の価値を示すのは、市民的な意識や態度という慣習的なものからの差異を明らかにするときよりも、長い年月に渡って培われてきて「意味するもの」から切り離され「意味されるもの」として固定されている伝統的価値との間に差異を形成していくときである。その「とき」というのはもちろん、彼が船長としての真価を発揮したとき、すなわち、台風の真只中で苦力たちの銀貨の寄せ集めを指示し、台風が静まってからその銀貨を自らの手で分配したときである。以下、この MacWhirr の言動について詳しく論じてみよう。

III

“Typhoon”の中心を成しているのは、一対の対照的な出来事である。すなわち、台風の真只中における銀貨の寄せ集めと、台風が静まったあとの銀貨の分配である。二つは対照的であるといっても見逃せない共通点ももっている。それは、いずれの場合も Jukes が苦力たちの銀貨と関係をもつことを極力嫌ったのに対し、MacWhirr はあくまでもそれとの関わりをもとうとしたことである。Jukes が銀貨との関わりを嫌ったのは、想像を絶する台風の猛威に彼が意気阻喪したり、苦力たちの暴動を恐れしたりしたためだが、いずれの場合も、世間一般の考え方に支配されやすい彼の苦力に対する人種の偏見がはっきり認められる。これに対して MacWhirr は、一貫して苦力を自分たちと同じ人間として遇そうとしたのだ。

まず、台風の真只中における二百人の苦力の銀貨寄せ集めという事件から見ていきたい。この事件は、七年の勤めを終え小金を貯えた苦力を二百人も乗せて彼らの故郷に向かっていた Nan-Shan 号が、想像を絶する台風にまきこまれたため引き起こされた。その台風に激しく揺すぶられ、二百人の苦力が各自所持していた木箱がぶつかり合って壊れてしまい、中に入っていた銀貨が散らばって誰のものか分からなくなったうえ、最初銀貨の奪い合いをするつもりだった苦力たちが激しく揺れる船に足場を失って転げ回り、あちこちに体をぶつけて重傷者を出すほどの大混乱に陥ったのだ。

最初この惨事を目撃した水夫長は、びっくり仰天して、早速船長に報告しに行く。この水夫長は、労を惜しまずよく働くが底ぬけのお人好であり、一等航海士の Jukes からは、“an ounce of initiative”も持っていないと軽蔑されている (p. 49)。が、MacWhirr 船長は逆にそのような彼を第一級の水夫長として高く評価している。それは、“initiative”というもののうさんくさを MacWhirr が無意識のうちに感じとっていたからかも知れない。普通、“initiative”を取るということは、取る人の自主性の現われとして積極的に評価される。が、仮に“initiative”が無意識のうちに心に植えこまれた考え方に無批判に準拠して取られるなら、それは高い評価を受けるべきものではあるまい。かえて、自主性とは似ても似つかぬ隷属性の現われとしてそれを否定した方がよい場合も出てこよう。特に Jukes のように感じやすい若者の“initiative”は、自立したものとなるより隷属したものとなる可能性の方が大きいと言える。彼とは逆に水夫長は、人が好いため他人の言説に左右されて全く頼りなく見え、はなはだしい隷属状態に陥っていると思われやすいが、Jukes と比べ彼の隷属性が特別に強いわけでは決してな

い。いやむしろ水夫長は、人の意識の流れのように気まぐれな現実の動きに流されながらも懸命に対応している点で、固定観念に捕われやすい Jukes より柔軟であり、隷属状態から脱しやすい生き方をしていると言えよう。実は、水夫長にこの柔軟性があったからこそ、放っておけば何人もの死者がでたかも知れない苦力たちの大騒動に彼は誰よりも先がけて気づくことができたのである。というのも水夫長は、想像を絶する嵐のすさまじさにおびえ切って明かりが欲しいと子供のようにわめく水夫たちのわがままに腹を立てながらも、明かりが苦力たちの入れられている船倉に六つもあることを思い出して危険を顧みずそれを取りに行くことによって、苦力たちの地獄状態を発見することができたからである。しかも水夫長は、苦力のことなどどうでもいいではないかと言う水夫たちに明かりを取ってこなかったためバカ呼ばわりされながら甲板に出て、すさまじい嵐の猛攻撃に実際何がどうなろうとかまわれないような気持になりながらも、命がけで船長のところまで行って報告したのだ。彼を第一級の水夫長と見なした MacWhirr の目は節穴ではなかったのである。

とはいえ、この水夫長と言えども、彼の報告を受けた MacWhirr 船長に比べれば、まだそれほど立派な働きをしたわけではない。なぜなら水夫長が報告後自分の責任をすっかり解除されたように感じ、あとは船長にすべてを任ずることができたのに対し、MacWhirr は己れ以外に頼れる人をもたず、ただ独り困難な事態に直面して決断しなければならなかったからである。彼を援助してくれるはずの一等航海士 Jukes は彼の傍らにいたことはしたが、彼もまた並の水夫と同じように台風のあまりの激しさに気が挫けてしまい、苦力などどうなったってかまわないという気持になっていた。MacWhirr はこの Jukes の気持をしっかりとらせて苦力たちの状態を見に行かせ、さらに散らばった銀貨を集めさせたのであるが、この彼は、見方によれば、Guerard の言うように単なる伝統の “unconscious servant” にすぎないと思えるかも知れない。仮にそうだとしたら、つまり仮に MacWhirr が “unimaginative” で “invulnerable to doubt”⁷ であったからためらうことなく命令できたとしたら、彼は道德律の自動人形にすぎないことになってしまうだろう。だが、もちろん MacWhirr はそれほど単純な存在ではないし、彼の命令も軽々に取り扱えない重みをもっている。

なぜなら MacWhirr は、船長としての決断を下すことの困難さを、Jukes に向かって何回か “You don’t find everything in books.” (p. 81) とか “There are things you find nothing about in books.” (p. 102) という言葉で伝えているからである。これらの言葉は、MacWhirr の決断が何らかの本に書いてあるような

指導原理に従ったものではないことを物語っている。もともと、想像を絶する台風の激しさに加えて二百人の苦力が大混乱に陥るという特殊な状況にどう対処したらよいかという指示など、どの本にも書いてないのは当然のことだろう。そのような状況に対してできることは、今までの経験に頼って新しい対応の仕方を考え出すことぐらいであろう。

MacWhirr と伝統との間に距離を見ようとししない研究家たちは、まさにこのとき、すなわち対応の仕方を考え出そうとする瞬間に、根源からの「声」が聞こえるのだと考えるかも知れない。この「声」とは、Derrida によれば、「意味されるもの」に対して“absolute proximity”⁸を保ち、「意味するもの」の“absolute effacement”⁹としての自らを聞くという意識のあり方のことである。このような「声」として、銀貨を集めに行かされて愚知をこぼす Jukes に MacWhirr が言った“(We) had to do what’s fair” (p. 82) が考えられるかも知れない。“what’s fair”こそ、「意味するもの」が消えた「意味されるもの」にほかならず、MacWhirr はそれに準拠して行動を起こしたと見なされるかも知れない。

しかし、“what’s fair”は Derrid の言う「声」ではなく「エクリチュール」なのである。あるいは、Derrida が借用している Saussure の区別に従えば、それは“sound-image”であり、“the structure of the appearing of the sound”を含んでいて、単なる“objective sound”あるいは“sound appearing”ではないのだ¹⁰。なぜなら、“what’s fair” (p. 82) に先立って言われた“You don’t find everything in books.” (p. 81) によって、イデア的なものは検証されているからである。「本に載ってない」と言えるには、自分が今まで読んだ本をすべて検証しなくてはならないのだ。それは直観的に一瞬のうちにこなされるのだが、それによってイデア的なものが相対化されたところから“what’s fair”が出されているのである。すなわち“what’s fair”は、「意味するもの」から切り離され「意味されるもの」として固定された伝統的価値を反映する“given structure”ではなく、“an active movement”として「意味するもの」なのである¹¹。もちろん、「意味されるもの」としての伝統的価値がそれ自身の根源として思い起こさせるイデア的なものを“what’s fair”が直接反映しているわけでもない。逆に、非＝表記的エクリチュールとしての“what’s fair”こそイデア的なものを生み出しているのであり、“what’s fair”を「エクリチュール」として、「差異」として、「脱根拠化」として生きることが、「船乗りの掟」のようなイデア的なものを生成していくのだ。

MacWhirr の“what’s fair”の生成は、苦力たちの銀貨を集めるように指示し

たときだけでなく、それを自ら分配したときも、この上なく恐ろしい障害にさらされる。すなわち、指示したときは台風が最も激しくなったときで、MacWhirr は猛り狂う波風の真只中で強まりゆく船長の責任感と孤独感に耐えていたが、分配のときは、言葉の通じない二百人の苦力の暴動も予想されたのである。いずれの場合も Jukes の方は、決して無能な一等航海士ではなかったが、気力を完全に挫かれて苦力なんかどうなろうと知ったことではないといった頹落した意識状態に落ち込んだり、お金に細かい中国人の苦力なら銀貨の分配に怒り狂って恐ろしい暴動が起こるに違いないとおびえたりしたのだ。いずれの場合も Jukes は、世界に埋没した典型的な小市民的意識の限界を露呈してしまった。彼の弱さは危機に際してもろくも暴露されたが、それは結局、白人世界に響いていた差別的な「声」に彼が繰られ、それを無意識的無批判的に反映してしまったためである。

もっとも、この「声」に繰られたのは、単に感じやすい Jukes だけではなくと思われる。なぜなら、MacWhirr が自分の独断で銀貨を公平に分配しようとして二百人の苦力を甲板に上げたとき、給仕はすっかりあわて、休んでいた Jukes を急いで起こしに來たし、賢明な機関長の Solomon Rout でさえ、平常心を失って“an unlighted cigar” (p. 100) をしきりに吸っていたのだ。もちろん一番大げさな反応をしたのは Jukes で、給仕の話を聞くとすぐに銃を何挺か取り出して部下の白人船員にも配り、自ら先頭に立って甲板に出て行ったのである。もともと彼は、苦力たちを船倉にとどめておき、その間に英か仏か蘭の軍艦を見つけてその保護の下に彼らと彼らの銀貨を中国の役人に引き渡すのが一番安全だと考えていた。それは、苦力に対する人並みな偏見に捉われた白人なら、自分たちの安全のためにいかにも考えつきそうな案であった。それはまた一見“what's fair”を実現する名案のようにさえみえる。もし Jukes が中国の役人の天下に周知知られた着服の慣習を知らなかったとしたら、彼の考えの立派さを疑うことはむづかしかったかもしれない。

だがもちろん Jukes は中国人の役人のよからぬ慣習を知っていたから、彼の考えは苦力のことを一切考えてやろうとしない独善的なものであることがわかる。これに対して MacWhirr は、本当に苦力のためになることを考え出して実行するのである。すなわち彼は、苦力たちが同一期間似たような所で働いていたため、所持していた金額もほぼ同じ位と考え、平等に銀貨を分配することに決めたのだ。

この分配は、一見最も単純な原理に従った自然で素朴な行動以外の何ものでもないようにみえるかも知れない。MacWhirr が鈍感で想像力が無かったから Jukes のように恐怖に捉われることもなく適切な処置がとれたと思われるかも知れない。

しかし、これはとんでもない間違いであるように私には思える。何度も言うように自然で素朴で疑うことを知らないのは MacWhirr ではなく Jukes なのである。Jukes は白人世界に響く「声」に操られ、それを無批判に反復しているだけなのに、自らのオリジナルな生を生きていると思いつ込んでいるのだ。これに対して MacWhirr の素朴さは明らかに異質である。それは、世界がいつのまにか構造化していた思考様式を一端すべて無化したあと、世界に改めて関わろうとするときに生まれる素朴さであるとも言えるかも知れない。言わばそれは浄化され純化されているのだ。といってもそれは、現実的なことを考慮しないというのでは毛頭ない。まるっきりその逆である。MacWhirr は、銀貨の分配をする前、通訳として乗り込んでいた Bun-hin 社の中国人事務員に、銀貨を返すのに最も妥当と思われる方法について船倉の苦力に説明に行かせていたのだ。MacWhirr とて、この世に日常生活者として生きているのであり、Jukes のように暴動化に対するおびえを感じないわけにはいかなかったと思われる。問題は、Jukes のようにそのおびえに操られるまま妄想を逞しくしていくか、MacWhirr のようにそのおびえを現実に対する適切な対応によって消していくかであろう。

そして最も大切なことは、何度も言うように、この対応が単に理念に導かれただけのものではないということだ。もちろん、“We must plan out something that would be fair to all parties.” (p. 99) という MacWhirr の言葉に、台風の真只中における決断に見られたような fairness という理念が見られないわけではない。しかし、理念というものは、具体的な現実行動を一切指示しないのである。台風のときと同じように、“what’s fair” は「意味されるもの」ではなく「意味するもの」として生成されねばならないのだ。そのことは、前にも見たように、MacWhirr が繰り返す “There are things you find nothing about in books.” (p. 102) というような言葉によって明らかである。MacWhirr は、重大な決断を迫られたとき、直観によって一瞬のうちに自分が読んだことのあるすべての本を検証し、同時に “fair” なものを自らの手で生成していったのだ。それを行なわせる直観は、一般に考えられているような意味で単純なのでは決してない。Gilles Deleuze によれば、Bergson の直観は、単純であるにもかかわらず、「質的潜在的な多様性」と「それが現実化される場である様々な方向とを排除しない」のだ。つまり、直観には「複数の受容の仕方と、他のものに還元できない多様な視点が含まれて」おり、単なる単純性を意味していないのである¹²。しかも直観に含まれる多様性は単なる空間的な数的多様性ではなく、数に還元されることのない時間的、質的多様性である。Bergson の言う持続または主観的なものは、潜在的にこ

の質的多様性を孕みつつ、そこから直観によって質的な差異化の線をつくり、現実行動へ向かうのだ。持続とは Bergson によれば本質的に記憶である。それは絶えず過ぎていく現在のなかに保存され蓄積される過去である。その過去は現在の前の時間を示しているのではなく、二つは共存する二つの要素を表わしているのだが、その過去のなかに私たちは飛躍によって一気に身を置くことによって、質的差異化の線を創造してゆくのである。

恐らく MacWhirr は、重大な決断を迫られたとき、長年の船乗り生活に鍛え上げられた優れた直観によって一気に過去の全領域に身を置き、その多様性から一瞬のうちに決断を下したと思われる。それは、純粹な記憶内容への呼びかけによる選択の行動であって、単に“books”に書かれていたこととか「船乗りの掟」などを思い起こしてそれに従った受動的反応とは異質のものなのだ。MacWhirr は、台風や散らばった銀貨がもたらした途方もなく困難な状況に直面して、何の指導原理に頼ることもできないまま一気に過去の中に飛躍したのだが、それは、全く新しい事態に直面した個人が自分の今までのすべての経験領域の中に飛びこんでそこから適切な答えをただ一つ選び出そうとする、この上なく凝縮された生命の飛躍的な活動にはかならなかったのである。

Conrad は MacWhirr について、彼が自分の二十年に渡る船乗り生活から生み出された人物であり、短期間の“Conscious invention”とは何の関係もないと言っている (p. vi)。もちろんこれは、MacWhirr が深い人生経験を積んだ作者の叡智の結晶だという意味ではない。それでは彼は、「意味されるもの」の直接的反映者にすぎないこととなってしまう。MacWhirr が作者の長年の船乗り体験から生まれたということは、結局、MacWhirr の直観の深みと豊かな多様性が後者から生み出されたということであるように思われる。なぜなら、MacWhirr の重要な言動の源は彼の直観だからだ。その直観が作者の人生体験によって鍛えられ、深められているのである。

このことはまた、一見伝統的規範に忠実であるようにみえる MacWhirr の言動が、実はそれから微妙にずれたものであることを示している。というのも、鍛えぬかれた直観的行動は、規範的なものの直接的反映ではありえないからだ。それは必然的に人生経験の多様性の中から規範的なものの選択と変容を行なわざるをえないのである。それがすなわち人間として生きるということであり、MacWhirr の言動はその典型的な形を私たちに示してくれていると言えよう。

Notes

- 1 Thomas Moser, *Joseph Conrad: Achievement and Decline* (Cambridge, Mass., 1957; rpt. Hamden, Con.: Archon Books, 1966), p. 19.
- 2 F.R. Leavis, *The Great Tradition* (1948; rpt. London: Peregrine Books, 1962), p. 206.
- 3 Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (1958; rpt. Cambridge, Mass. and London: Harvard Univ. Press, 1979), p. 296.
- 4 T.S. Eliot, *The Sacred Wood* (1920; rpt. London: Methuen, 1960), pp. 48-49.
- 5 Lawrence Graver, *Conrad's Short Fiction* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1969), p. 95.
- 6 Joseph Conrad, *The Nigger of the "Narcissus" and Typhoon & Other Stories* (London: Dent, 1950), p. 14.
以下、“Typhoon”から引用する文の頁数は本文中に示す。
- 7 Graver, p. 95.
- 8 Jacques Derrida, *Of Grammatology*, trans. G.C. Spivak (Baltimore and London: The John Hopkins Paperbacks, 1976), p. 12.
- 9 *Ibid.*, p. 20.
- 10 *Ibid.*, p. 63.
- 11 *Ibid.*, p. 51.
- 12 ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳(法政大学出版局、1974年)、pp. 4-5.

(昭和61年10月30日受理)